

学生参加型授業の実践報告

赤堀 勝彦

I. はじめに

現在、大学教育においては学修時間の短さなどを改善し、主体的な学修を強化、大学生の学びの質そのものを転換することが求められている。大学側もこれを好機と受けとめ、双方向的な授業やPBL（Project-Based Learning：課題解決型学習）¹などを通じたアクティブ・ラーニング（Active Learning）の導入や強化を進めている（吉本 2014）。

2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」によれば、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意志疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」（中央教育審議会答申 2012）としている²。

本稿では、アクティブ・ラーニングの一環として「学生参加型授業」の実践報告を以下に述べることとする。

II. 学生参加型授業の実践

1. 専門科目の授業における5つの作業の導入

これまでの大学の授業への学生参加ということに関して言えば、学生にとっては教員の講義を「聞く」作業と板書やノートを「書く」作業の2つが中心であったといえる。

「聞く」作業と「書く」作業によって教員の説明したことの理解が進み、参加の度合いは高まる。さらに、「聞く」と「書く」に加えて、「読む」、「考える」、「話す」の5つの作業を導入することにより、学生の授業への参加水準は一層高まると考える。

(1) 「読む」作業

学生にテキストの一部を音読させて授業を進める。その場合、学生の声が小さいと聞きにくいので無線マイクを学生に回しながらテキストを読ませる。効果としては、いつ指名されるか分からないので、居眠りする学生はほとんどいない。また、音読させる学生には、その都度名前を聞くことにより、教員も学生の顔と名前を記憶できるというメリットがある。さらに、テキストの文章をスムーズに読めるか否かで、学生の学力水準をかなり把握できる。この場合、文章を読むのを中断させながら、「ここは重要なので、赤のボールペ

ンや蛍光ペンで線を引いて」などと強調することにより学生を授業に一層専念させることができる。一方、学生側からは教員に名前を記憶されているということで、授業への参加度は一気に高まる。

(2) 「考える」作業

90分の授業終了前の15分間で所定のレポート用紙に感想文を作成して提出させることにしている。また、感想文のほかに、授業の要旨と当日使用したテキストの該当箇所（ページ）を明記することを指示している。感想文は、「考える力」を養うのに大きな効果がある方法の一つといえる。また、講義を熱心に聴かない限り、しっかりした感想文を作成することはできない。したがって、効果としては、感想文を作成することにより授業の振り返りができるとともに授業の要旨やテキストの該当箇所を明記させることによりテキストの持参を励行させることができる。

(3) 「話す」作業

授業において「話す」ということは、一般的には学生からの質問を指すが、授業中積極的に手を挙げて質問する学生は非常に少ない。そこで、本稿でいう「話す」とは、教員が学生に質問する、それに学生が答えるということである。筆者の場合、①テキストの重要箇所を学生に読ませながら、テキストに記載されている用語の意味とそれに関連した基礎知識または一般常識を質問する場合と、②すでに授業で説明したことについて発表させる場合（復習）の2つである。

①については、学生がどの程度テキストに記載されている用語と一般常識を身に付けているかを確認するために行っている。これを把握していないと教員は一方的に授業を進め、学生と教員の間のギャップは知らないうちに拡大していくことになる。このリスクを防ぐためにも、常に質問をしながら学生の常識水準を確認しておくことが重要と考える。

②については、予め指名した学生に、授業開始時に5分程度の前回授業の復習発表を課すことにしている。手順としては、授業終了時に次の発表希望者を指名することになっているが、実際はほとんどが手を挙げないので筆者が適宜指名することになっている。

大勢の前で一人で発表するのは、ほとんどの学生が苦手のことから、教員が指名して発表することで今後の自信につながるという効果も期待できる。ただし、ごく稀であるが、性格上、精神上等の理由により大勢の前で発表できない学生もいることを踏まえて毎回の感想文に「どうしても復習発表できない者は、理由を明記してその旨書いておくように」との指示をすることになっている。学生の対応はすべて一律にはいかないことを銘記すべきと考える。

2. 大教室での授業の進め方³

大人数⁴では学生の反応が見えにくく、学生も不明なところを質問しにくいいため、授業構成を臨機応変に行うことが難しい場合がある。したがって、大教室では、無線マイクを

学生に向けて発言を促すことや教壇の上を歩き回るだけでなく、教室内の中央や後部の通路を歩き回するなど多様な教育手法を取り入れた授業構成を行うことが望ましいと考える。

筆者の場合は、授業中ピンマイクは教員用として使い、無線マイクは学生に渡して、適宜コミュニケーションを図りながら進めている。また、眠そうな受講生がいたら、テキストの重要な箇所を読むように指示するとか簡単な質問をして睡魔を追い払うように努めている。さらに、私語や遅刻などを防ぐために席を指定することも有効と考える。その場合には、できる限り座席を前方中央に固めることも重要である。座席を指定すれば、受講生の確認が容易にでき、個人名で呼びかけることにより、教員と学生の距離が短くなる。特に名前でも相手を呼ぶことは、人間関係を築くための基本的なことからである。大人数のクラスでは全員の名前を記憶するという事は困難であるが、可能な限り、学生の名前と顔を一致させ、名前を尋ね、意識的に学生を名前と呼ぶように努めることが重要である。学生は、自分が大人数の中の一員としてではなく、個人として扱われることに感動し、授業に参加することに責任を感じるようになる。また、大教室の授業でも、顔を見ながら個別に話しかける、意見を述べさせる、テキストを読ませる、ノートに書かせる、発表させるなどという作業によって、学生とのコミュニケーションが一層高まるという効果もある。

3. 専門ゼミナール（演習）の進め方

(1) 2年次生のゼミナール

① 1分間スピーチ

ゼミナール開始時にまず、ウォーミングアップとして1人1分間スピーチを励行している。スピーチの内容は、最近1週間の出来事と感想で、マスコミで取り上げた事件、家族、個人のことなどテーマは自由としている。スピーチの目的は、自分で考えたことを人前で短時間に伝える力を養うことにある。

② グループ報告

3人一組で専門のテーマについて10分程度の報告を行う。一つのテーマを3人で分担して報告し、その後質疑応答を行う。質問では、用語や語句の意味を訊くのではなく、必ず報告者の意見を訊くように徹底させている。用語や語句の意味に集中してしまうと議論にならなくなってしまふからである。また、質問者が少数の限られた者に集中しないように、報告者からも適宜、質問者をフルネームで指名するようにしている。フルネームで指名する目的は、ゼミ生同士の距離が短くなり、より親近感を持つことができると考えるからである。「フルネーム」を覚えるのはビジネスパーソンの仕事といわれているところから、学生時代にその習慣をつけておくことは大事なことと思う。

さらに、質問を受けた報告者は、マナーとして、「質問有難うございます」という返事をしてから質問者に回答するように指導している。

③ グループ評価

グループ報告が終了した時点で、グループ報告者のリーダーは適宜評価をする者を指名する。評価を指名された者は、「良かった点」と「改善点」を述べて、A～Dの評価

をする。ここで重要なのは「改善点」である。「良かった点」は、褒め言葉を述べれば済むが、「改善点」は、報告を真剣に聴いていない限り、的確な「改善点」を皆の前で話すことはできないからである。その後、報告者は一人ずつ振り返りを30秒～1分程度にまとめて皆の前でスピーチする。

④「振り返りレポート」の作成と報告

グループ報告が終了した後は、翌週までに質問を受けた個所と質問者の名前を明記して議事録を兼ねた「振り返りレポート」（テーマにかかわる判例の要旨などを含めてA4用紙で5～6枚程度）を作成し、翌週、全員にコピーを配布するとともに担当分について簡潔に「振り返りレポート」の報告をして、当該テーマの報告を完成させる。「振り返りレポート」を完成させたグループは、翌週新しいテーマのグループ報告の準備に取り掛かる。

⑤感想文の作成

ゼミ生全員に演習終了後の感想文を作成し、当日中にメール添付送信することを課している。感想文を作成することの目的は、ゼミ生全員が授業時間中に集中して報告を聴き、演習内容を振り返り、課題を考える力を養うことにある。また、短時間で文章をまとめるトレーニングにもなる。

感想文は、A4一枚程度（1,000字以上）で記述内容は以下の（表）のとおりである。

（表）ゼミナール終了後の感想文の項目

○○年○月○日 氏名：
1. グループ報告の概要とコメント (1) Aグループ（メンバーをフルネームで明記） ①報告概要 ②コメント（良かった点、改善点、評価（A～D）） (2) Bグループ（メンバーをフルネームで明記） ①報告概要 ②コメント（良かった点、改善点、評価（A～D）） (3) Cグループ（メンバーをフルネームで明記） ①報告概要 ②コメント（良かった点、改善点、評価（A～D）） 2. ゼミナール全体の感想 3. 自分自身の振り返り（質疑応答を積極的に行い、良かったことや成長点、改善点、反省点など） 4. その他（上記で書き足りなかった点やゼミナールへの要望など提案したいことがあれば、自由に記載）

(2) 3年次生のゼミナール

①日経記事の1分間スピーチ

3年次生は就職活動の開始時期であることから、特に前期は90分の授業を30分加えて120分行う。現在の時間割では、原則として3年次生のゼミナールは昼食後の3時限目（13時15分～14時45分）に配当されているため、学生の要望なども聞き、昼休みを30分利用して、当日の日本経済新聞の記事（主に社説、政治、経済、金融関係記事）

を早朝に読んで、自分の意見、感想をまとめて1分間スピーチを行うようにしている。これを実施することにより、日経紙の読解力が高まるとともに就職（企業および公務員）の面接や就職後社会に出て大切なコミュニケーション力やプレゼンテーション力が養成されることが期待できるからである。

さらに、昼休みは誰でも自由時間であることから、他のゼミに所属している学生にも希望者には30分間の自由参加を案内している。実際に数名の学生が参加することもある。

②グループ報告

3人一組でグループ報告を行うことは、2年次生と同じであるが、異なる点は報告者が一つのテーマを通して報告し、他の2名は質疑応答に専念するという役割分担を明らかにしていることである。また、3年次生の後期には報告者はできるだけレジュメを見ないで自分の言葉でプレゼンテーションを行うように勧めている。3年次生の前期までは、自分たちの調べたことを報告することで精一杯であったが、後期からは単なる報告ではなく、プレゼンテーションを意識して行うように指導している。

③グループ評価、④「振り返りレポート」の作成と報告、⑤感想文の作成については、基本的な形式は2年次生の時と変わらないが、3年次生には内容を一層充実させるように指導している。

(3) 4年次生のゼミナール

①就活（就職活動）と研究報告

4年次生の前期は、ほとんどが就活のため、常に全員が出席することは難しい。したがって、3年次生の時のように3人のグループ構成の代わりに単独で研究報告を行うこととしている。また、就活中でもゼミナール日時が面接などに当たらない限り出席するように指示している。出席することにより、相互に就活情報の交換もでき、早く内定を取得した者からは刺激を受けるなどさらに意欲を高めるなどの効果を得られる。

さらに、面接などでゼミナールを欠席する場合は、当日の面接の概要と反省を含めた感想文をA4の用紙1枚程度にまとめて当日中にメール添付送信することを課している。学生は感想文を作成することにより面接などの振り返りができ、今後の就活にも役に立つことが多い。筆者は、学生の感想文を読んで、筆者の感想・アドバイスなどを折り返しメールで返信することとしている。

②内定したゼミ生の下級生（2・3年次生）へのアドバイス

就職内定したゼミ生には、順次2年次生、3年次生など下級生のゼミナールにも出席するように指示して、下級生のグループ報告などのアドバイスを行うことにしている。後輩の指導を行うことは、本人の良い経験と勉強にもなり、後輩との交流も深まるという効果も期待できるからである。

③卒業論文の完成

2年次生のミニ論文からスタートして、3年次生で卒業論文の概略を作成しているので、4年次生ではさらに論文原稿を練り上げて完成させる。

(4) その他

①ゼミナール合宿

毎年、大学の休暇（春期または夏期）期間中、バスを貸切り、近距離のところ（2013年度は京都市）で一泊2日の2～4年次生合同のゼミ合宿を行っている。目的は、合宿先で参加者全員に予め準備した専門分野のテーマで5分間の報告と質疑応答を行うことで人前でのスピーチに自信を持たせることと合宿により学年を超えた交流を一層深める効果を期待できるからである。

なお、参加者には、合宿帰宅後翌日中までにゼミ合宿の感想文を1,000字程度にまとめてメール添付送信するように指示している。ゼミ合宿は、ゼミ旅行ではないので必ず合宿で得たことの振り返りを課すことにしている。

②ゼミナール交流会

毎年、前期開始前の3月下旬と後期開始前の9月下旬に卒業生を含めたゼミナール交流会を実施している。目的は、これから開始する授業の参加意欲を高めることと先輩と後輩の交流を深めることにある。在校生は企業や公務員として活躍している卒業生の仕事の話を聞くことができ、将来のイメージをより明確にすることができる。

なお、在校生には、翌日中までにゼミ交流会の感想文を1,000字程度にまとめてメール添付送信するように指示している。交流会は、単なる懇親会ではないので必ず交流会で得たことの振り返りを課すことにしている。また、交流会では上級生や卒業生に対して、下級生に積極的に話しかけるように促すことにしている。

③課題論文作成のホームワークの実施

ゼミナールでは、2年次生、3年次生に対して春期・夏期・冬期の休暇中に専門テーマの論文作成をホームワークとして課すことにしている。

すなわち、2～3月の春期休暇には、2年次生には10,000字程度、3年次生には15,000字程度の「法的リスクマネジメント」に関する論文課題を出し、8～9月の夏期休暇には、2年次生、3年次生に対して「法的リスクマネジメント」に関する個人ワーク（15,000字程度）とグループワーク（15,000字程度）の論文課題を課すことにしている。個人ワークの課題は、春期テーマを発展させたものでもよいし、新しいテーマにチャレンジしてもよいことにしている。

グループワークは、3人一組でグループ長を中心にテーマを決めることとしている。さらに、冬期の休暇は短いので、最近の法的リスクに関するテーマを事前に挙げて、その中から一つ選択して、B4の用紙10枚程度（手書き）で作成し、冬期休暇明けの最初のゼミナール日に提出するように指示している。

ホームワークの目的は、個人ワークでは、自分でテーマを決めて調べて、考える力を養うことにあるし、グループワークでは、共同で作業する習慣をつけることにある。このことは、社会人になってから一層重要になることを理解させるのにも役立つ。

Ⅲ. おわりに—学生参加型授業の課題—

以上、学生参加型授業の実践報告として、「大教室での授業」および「専門ゼミナール」の進め方について、筆者の体験を踏まえて述べた⁵。学生参加型授業は、一般の講義型授業と比較すると多くの効果がある⁶反面、学生に伝える情報量が低下するという問題点が挙げられる。したがって、今後の課題としては、授業で伝えられる情報量の低下をいかにして補うかの具体的な対策を考慮する必要がある。

注

- 1 PBL (Project-Based Learning) とは、和訳では「課題解決型学習」であり、座学（講義形式教育）と一線を画するものである。PBL では、特定の分野において必要とされる知識や情報を一定の文脈に即して有意義的に獲得させることを意図している。PBL の特徴は、学習への動機づけに最大限の配慮を行うとともに、問題解決の一連のプロセスを自律的に遂行する点にある（上杉賢士「PBL 情報化社会の新たな学習法 - 上 - PBL とは何か ミネソタ州ニューカントリースクールに学ぶ」『日本私立大学協会 教育学術オンライン』2362号 2009年6月10日。(https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2362/3_2.html)
- 2 具体的には、知識伝達中心の講義から、ディスカッションやディベート、演習や実験・実習等を伴う授業への転換が期待されている。
- 3 「大教室での授業の進め方」は、赤堀勝彦「効果的・実践的授業のすすめ方—大学授業改善の一手法として—」『教育開発センタージャーナル』2号 2011、15.の一部を引用した。
- 4 一般に受講生が150人を超えると「大人数」と呼ばれるが、例えば、筆者の担当科目では、「マナーアップ講座」（2009年度158名）、「法政基礎講座1（リスクマネジメント論）」（2011年度234名、2012年度205名）などが本稿での「大人数」に該当する。
- 5 本稿で述べたようなことを徹底させることにより、毎年ほとんどのゼミ生が夏期休暇前には志望先企業から内定を取得している（ただし、公務員の内定は試験の関係でその後になる）だけでなく、就職後も各方面での活躍が期待されている。
- 6 学生参加型授業は、活発な討論能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ、協調性、共同作業能力、責任感、社会性の把握、能動的行動力、チームワーク能力、知識発見、自己発見、自己能力開発など、高い教育効果、大きな教育の生産性を示す（北海道大学高等教育機能開発総合センター「大学における学生参加型授業の開発」『高等教育ジャーナル』4号 1998、47。(<http://hdl.handle.net/2115/29781>)

参考文献

- [1] 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的展開に向けて～生涯学び続け主体的に考える力を育成する大学へ～」2012、9。
- [2] 吉本圭一「キャリア教育とアクティブ・ラーナー」『キャリア教育研究』32巻2号 2014、49。